

第2回桃山学院大学図書館書評賞受賞作一覧

〔優秀書評賞〕

山村 昭太（経済学部1年次生）

佐々木 俊尚『グーグルGoogle既存のビジネスを破壊する』 文藝春秋 2006年

松田 憲人（社会学部3年次生）

前坂 俊之『メディアコントロール』 旬報社 2005年

〔佳作〕

竹内 綾菜（文学部3年次生）

太田 光・中沢 新一『憲法九条を世界遺産に』 集英社 2006年

木谷 友子（文学部1年次生）

徳永 進『心のくすり箱』 岩波書店 2005年

岡本 いずみ（経済学部2年次生）

Souad『生きながら火に焼かれて』 ソニーマガジズ 2004年

原田 達也（経済学部1年次生）

島本 慈子『戦争で死ぬ、ということ』 岩波書店 2006年

総合講評

図書館長 社会学部教授 松永俊男

昨年度から始まった図書館書評賞に対して、今年度は140作品の応募がありました。昨年度の55作品から大幅に増加し、主催者側としては嬉しく思っています。各学部から選出されている図書館委員5名の合議により、優秀書評賞2編、佳作4編を決定しました。残念ながら今回も、最優秀書評賞の該当作品は認められませんでした。

応募作全体を見たときに残念なのは、指定の書式（本文は40字×40行）になっていない作品がかなりあったことです。今回の書評賞に限らず、書式が指定されている場合にはそれを順守することが第一に求められることです。

書評というかぎり、本の内容が的確に紹介され、それに対する評者の評価がなければなりません。しかし残念なことに、応募作品の多くは、内容紹介に止まり、評者の評価がありません。「面白かった」「役に立った」といった感想を書いただけでは書評にはなりません。その本のどこが優れているのかを指摘しなければなりません。また、本に書かれていることと、評者の意見とが明確に区別されていない作品もかなりありました。この区別は明白でなければなりません。

今回の受賞作のうち、優秀賞の2点は、内容紹介が的確になされていますが、残念ながら2作品とも評価の部分が本文をうのみにしただけに終わっています。また、『メディアコントロール』では、文章が練れておらず、わかりにくい日本語になっています。最優秀賞にはまだ距離があるといえるでしょう。

佳作4作品の場合は、いずれも内容紹介に問題があります。『憲法九条を世界遺産に』では、著者・太田光の思想が十分に伝えられていません。『生きながら火に焼かれて』では、本書の大半を占める日常生活の描写について触れていません。『戦争で死ぬ、ということ』では、本からの引用なのか、評者自信の言葉なのか明確になっていません。『心のくすり箱』では、新聞に連載した短い随想を100編、集めた物であるという基本的な説明がありません。こうした問題があるにせよ、対象の書籍をよく読み、自分なりの言葉で書評を書いた努力が認められ、佳作と認定したしだいです。

以上の点を参考にして、次回以降もより多くの学生諸君から、より素晴らしい書評が出てくることを願っています。

佐々木 俊尚 『グーグルGoogle既存のビジネスを破壊する』

山村 昭太 (経済学部1年次生)

「Google」。インターネットを利用する人で、この名前を知らない人はいないと言っても過言ではないだろう。Googleといえば、WEB検索サイトを思い浮かべる人が多いだろう。Googleという企業はこの検索サービス以外にも、マウス操作だけで各地の地図を表示できる「グーグルマップ」をはじめとする数多くのサービスを提供しており、私たちはそれらの殆ど無料で利用することが可能だ。

佐々木俊尚氏の「グーグル 既存のビジネスを破壊する」は、この「無料サービス」のカラクリをはじめ、Google という企業が目をつけた新しいビジネスとその構造、それに対抗するライバル企業や、一般の Google 利用者たちの動きなどから、Google のサービス利点と問題点を紐解いていくものだ。

現在市場では「高い売上げを誇るヒット商品」が市場では希少なのに対し「売上は低いが小数の需要は確実にある商品(ロングテール商品)」が市場全体の 8 割を占める。Google はそこに目をつけた。Google の検索サービスに連動して、検索用語に関連した広告を表示する「アドワーズ」というシステムを開発したのだ。このアドワーズを利用すればロングテール商品を扱う世界中の中小企業が、自社の商品を需要する人に対してピンポイントで広告を届けることが可能になる。新聞や雑誌に広告を掲載するよりも遥かに効果的な宣伝となる。

しかし筆者は、このアドワーズのメカニズムを賞賛しているわけではない。むしろ Google によるネット社会の独裁を危険視している。

例えばグーグルは、検索結果の表示順位決定する計算式を公開していない。それどころか、検索結果として表示されるか否かも Google の独断によって決定されている。インターネットが世界経済に大きな影響を与え始めた現在、Google 検索から追放された企業(筆者は「Google 八分」と表現している)は、ネット社会においては存在そのものを否定されるのと同等の意味を持つことになるというのだ。

私たちの生活とインターネットはもはや切り離すことが出来ないほど密接な関係を持っている。何か商品を購入する際に、まず Google で検索するところからはじめる人も少なくない。そういった環境において、Google のアドワーズ広告がどれほど大きな効果を持つかは言うまでもないだろう。アドワーズに登録している企業が大きな利益を上げ、そうでない企業は生き残ることが出来なくなる。Google によって検索結果に表示されなくなった企業の存在は否定される。これはまさに「司祭」としての Google による独裁であると言えるだろう。

著者が指摘する Google による独裁はまさに恐るべきものだ。Google の権力に全世界のあらゆる企業がひれ伏さなければならない日も近いかもしれない。我々は、一企業である Google が世界のビジネスを掌握するという特異な事態の危険性を理解し、正しく認識する必要があるだろう。

この本は太平洋戦争、ベトナム戦争、湾岸戦争、イラク戦争の4つの戦争に視線を向け、20世紀以降の戦争におけるメディアの行動や責任、更にメディアとはどうあるべきかについて述べられている。中でも太平洋戦争についての記述が多く、全301ページのうちの半分近くがそのことについて述べられている。

太平洋戦争中、朝日・毎日新聞社が先頭に立って事実と反した日本有利の記事をでっち上げていた。新聞が民衆の心理に強く影響するものとして知っていた新聞社がなぜ易々と軍部の言いなりになったのか。またそれはいつ頃からのことであったのか。その詳しい経緯について筆者の考えも交えながら述べられている。規模の小さい新聞社が行っていた真実の報道は評価の対象に、民衆の扇動を行った大新聞社は厳しい批判の対象となっている。

ベトナム戦争においては、日本が先の戦争の教訓を生かし、北ベトナム側の視点からの報道を行ったことを評価されている。中でも毎日新聞社の大森記者は絶賛されている。なぜなら、ベトコンが活動する村への取材を行い、ベトナム戦争の現状を紹介したことで日本のベトナム戦争に関する関心を高めたからである。結局この戦争においてアメリカはメディアコントロールに完全に失敗した。そのせいで毎日新聞社などアメリカにとって不都合な情報を流すマスメディアに対して圧力をかけたことが浮き彫りになっている。

そして、ベトナム戦争でマスメディアをある程度自由にしてしまったことでメディアコントロールを失ったアメリカが、湾岸戦争では厳しい報道規制を敷くこととなる。アメリカ側はプール取材という制度を強要した。この制度が報道取材できる新聞記者の数を大幅に減少させ、メディアコントロールをしやすい状況を作った。また、書かれた記事は軍の将校の目に通された後アメリカに都合の悪い記事は削除され、アメリカにとって都合の良い記事しか報道されなくなる。湾岸戦争で有名なのが油まみれの水鳥の写真である。当初はイラク側の環境テロと騒がれていた。しかし、実際はその写真もアメリカの攻撃によるものであった。その事実が判明したのはマスコミの地道な検証取材であった。「戦争報道には検証記事がいかに重要であるかを改めて示したケースであった」と著者は述べている。

21世紀の戦争として取り上げられているのがイラク戦争である。アメリカはエンバット従軍取材という、世界中の記者600人が従軍する一見公開性の高い取材制度を敷いた。しかし、この制度はアメリカによって巧妙なメディアコントロールを可能にする為の制度であり、決してメディアの自由な参加を認めるためのものではなかった。その為、マスメディアは知らず知らずのうちにメディアコントロールを受ける形となってしまった。そんな中、イスラムのメディアである「アルジャジーラ」はイラクの立場にも立たず、アメリカの立場にも立たず、メディアが本来あるべき姿である中立の立場に立って報道を続けた。アメリカ・イラク両国から強大な圧力をかけられ続けた「アルジャジーラ」ではあったが、著者は国家に屈しないその姿勢を高く評価している。

全編を通して主張されているのが、政府や軍部によるメディアコントロールの圧力に屈しなかったマスメディアや人物への評価や、反対に屈してしまった方への批判である。メディアコントロールに屈してはならない。口で言うのは容易く、実際に行動するのは難しいことである。しかし、こういったことを取り上げてマスメディアの使命を再認識させることで、間違った方向に進まないようにと警笛を鳴らす。この著作を読むことでマスメディアとはどうあるべきかを改めて確認することが出来る。

竹内 綾菜 (文学部 3 年次生)

著者の太田光は爆笑問題というコンビで活躍しているお笑い芸人である。元々社会問題を扱ったお笑いで人気を博していたが、近年、その傾向はさらに強くなり、出演番組や著書で多くの政治・社会問題について意見を述べている。その著者が今最も興味を持っている憲法第9条、憲法改正問題について、人類学者である中沢新一と対談したものを1冊にまとめている。

著者は「憲法第9条を世界遺産に」という考えを掲げながら、平和憲法の根底にある問題に無思考のまま、現在の国際情勢などに流されるまま憲法改正に向かうべきではないと主張している。

これまで数多くの太田の著書を読んだが、彼がこれほどまでにひとつの意見に執着し、力強く語っているのは初めてではないだろうか。そこからいかに彼がこの考えに強い思いを持っているか、この考えを多くの人達に伝えたいのかという気迫すらも感じられた。

その反面、自分が憲法改正問題に対して無関心の日本人の中の一人だということを痛感した。この著書を読んだのをきっかけに、少しずつでも日本の抱えている問題について考えていかなければならないと感じた。

Souad 『生きながら火に焼かれて』

岡本 いずみ (経済学部 2 年次生)

あなたはご存知だろうか。今尚、この地球上に、恋に落ちただけで殺されてしまう女性たちがいることを。そして、毎年約六千人もの女性が、そのことによって命を落としているということ。

本書は、奇跡的に生存した被害者がその事実を証言したものである。彼女の名はスアド。中東シネソルダンの小さな村で、ごく「当たり前」に育てられた。女性は、男性に召し仕えるのは当たり前。家事に失敗すれば、体罰も当然だった。自由に外出することも許されない。もちろん、女性が自由によその男性に思いを寄せるなどということが許されるわけもない。娘の結婚相手は、父親が決定するのだ。仮に結婚前の女性が異性と関係を持った事が発覚したら、彼女の家族は一家の名誉を汚したふしだらな娘を殺す。「名誉の殺人」と呼ばれる行為だ。この場合、殺人を犯した家族が罪の間われることは少ない。

そんな「当たり前」の環境で何の疑いも抱くことなく、スアドは厳格な父に仕え、ゆくゆくは父の選んだ男と結婚するはずだった。

しかし、彼女は恋に落ち、身ごもってしまった。当然ながら、彼女の妊娠は一族に知れ渡り、結果としてスアドは父親の命を受けた義兄にガソリンをかぶせられ火で焼かれることになった。「名誉の殺人」が実行されたのだ。

本書は、筆者自身の悲惨な体験を語ることによって、中東地域で行われている女性に対する虐待を世界に知らしめている。筆者が支援団体の力を借り、母国を脱出した後の苦悩を描いた点も、目を背けたくなるほど衝撃的な内容をふくむものの、女性たちの深刻な心の傷を表現するために効果的だったのではないだろうか。

本書は筆者スアドの強い決意によって書かれた。そのため本書は「名誉の殺人」の理不尽さを訴えかけるだけでなく、スアドという一人の女性の伝記としても人々を惹き付けるのである。

木谷 友子 (文学部 1 年次生)

この本に書かれているのは、一医者による生活のさまざまな一場面。例えば、病室での患者とのやりとりだったり、回診先・旅先での出来事だったり、ふと頭を過ぎった少年時代の回想だったり、何気ない日常だったり。一見すると、ただの取り留めのないエッセイのようだ。しかし、ここに登場する人々は皆、自分の生と死に真正面から向き合っている、という点で確かに繋がっていると思う。自分の生まれ故郷に治癒の力を求めた患者、癌を告知されても航海を続けた船乗り、病気の妻を励まし寄り添う老夫婦、死を前に「一服」したアル中の和尚さん、家族全員に看取られてこの世を去った男性、信じ続けて奇跡を起こした夫婦。形は様々だが、現状に目を背けずに在るがまを受け入れて、しかし、逃げたり諦めているわけではない。そしてもうひとつ共通していることは、これらの人々のそばには必ず誰か支えとなる人物が存在しているということだ。

「死に行く人は垂直の力の中にある。心は天に、体は重力で地に向かう。もうひとりの人がそばにいと、二つの物体の間に引き合う水平の力が生まれる。垂直の力の中に水平の力が加わると、死は温かい」(本文 p.54)

同じ空間を共有する。ただそれだけのことが、どんなに優秀な鎮痛剤も安定剤も敵わない薬となることがあるようだ。死は誰にでも訪れ、避けられないものである。だからこそ、私たちが最後の瞬間に望む薬は、決して一時的な気休めの為の鎮痛剤ではなく、心を癒す薬なのではないか。

島本 慈子 『戦争で死ぬ、ということ』

原田 達也 (経済学部 1 年次生)

この本では空襲や原爆による死だけではなく、特攻による死、他国への侵略またそれによる報復、毒ガス開発工場での死、と多面的に戦争死の検証を試みている。

本書は戦後生まれによる戦後生まれのための本としているが、まさにその通りで、歯切れがよく簡潔な文章は内容を理解しやすい。そして、突然落とされたと言られることの多い原子爆弾に、実は日本も期待していたことなど、教科書には載らない戦争の真実を知ることができる点も優良である。また、終章には「九月のいのち」と題し、9・11 同時多発テロのことを取り上げていて、戦争は現在の問題でもあるという著者の姿勢が窺える。

さて、本書により戦争の現場を少なからず学んだわけだが、あえて本書の残念な部分を挙げるとする、それは戦時における大人の姿があまり見えてこない、ということなのだが、このことはこの本の良さを何等貶めるものではない。

自衛隊のイラク派遣、憲法第 9 条改正問題など、きな臭さが漂う現在の日本である。この本を読んだ者は戦争の現実について、そして戦争をなくすためにはどうすればいいかを考えずにはいられないはずである。

(注) 佳作4点については、本文のほぼ半分を抜粋して掲載した。